

[学術論文]

## 狼信仰を用いた三峯山の経済活動

—近世における庶民経済の発達による信仰形態の変化—

### **Economic Activities at Mount Mitsumine and Wolf Veneration: Worship Changes Triggered by the Infiltration of Monetary Economy in the Early Modern Period**

長谷川 恵理  
Hasegawa Eri

はじめに

1. 狼信仰導入の経緯
  - 1.1 狼信仰導入時の三峯山
  - 1.2 オオカミにまつわる民間習俗と山の神
2. 狼信仰と眷属札
  - 2.1 御眷属拝借システム
  - 2.2 眷属札の多彩な霊験
  - 2.3 三峯講の状況
3. 狼信仰による観光地化と地域活性
  - 3.1 三峯山組織
  - 3.2 観光地化と地域活性
4. 三峯山の寺格上昇
  - 4.1 花山院家との猶子関係と院室
  - 4.2 江戸城への乗輿独礼
  - 4.3 明治以後の三峯山

おわりに

**要旨** 近世は、商品作物の栽培や養蚕業の興隆などによって庶民経済が発達し、庶民たちは自らが求める娯楽や情報、はては現世利益まで貨幣と交換できるようになった。一方で寺社側も、運営資金を稼ぐために、庶民の関心をひくく現世利益の信仰を喧伝するようになる。そのなかで頭角を現し、流行神にもなったのが三峯山である。三峯山は自山再興の資金獲得手段として、1720年から狼信仰を導入した。そして時代の潮流に合わせて、多彩な霊験を謳った護符を「オオカミの分身」として貸し出す御眷属拝借システムを開発した。こうして莫大な資産を築いた三峯山は、地方寺院とは思えないほどの寺格上昇に成功した。

**キーワード**：狼信仰、三峯山、御眷属札、三峯講

## はじめに

近世は、民衆の生活変化により信仰の在り方が変化した時代である。江戸では都市化が進み、日常生活の中で山や森と関わる頻度が減少し、自然風景は遠く離れたものになっていた。例えば、中世では自然風景の中で起こる現象を、妖怪が起こす怪異や神仏からの警告ととらえていたことに対して、近世における妖怪は、鳥山石燕（1712-88）が『画図百鬼夜行』に描いたように、視覚化され、非日常性を楽しむ娯楽としてのキャラクターとなっていた<sup>1</sup>。

また国内では養蚕業が興隆したことや、商品作物の生産量の増加などから、庶民層への貨幣経済が発達し、庶民たちにとって「貨幣」を「商品」と交換する生活が一般的となり、「商品」として交換されるものには物品だけでなく信仰も含まれるようになっていた。

このような経済の発達によって、日常的に庶民が貨幣を扱えるようになると、寺社側の経営も、貴族層や武士だけでなく対象を庶民へと広げる方針へと変化していった。宮田登氏は『江戸町人の信仰』のなかで、寺院経営の変化について、1688（元禄元）「寺院古跡地之定書」によって新地寺院の建立が禁止されると、諸寺院はこれを機に財政が幕府から切り離され、特に中小寺院は、自己の力で寺院経営に取り組みなければならず、祈禱寺は自分の寺内にある神仏に新たな靈験を付して、縁日や開帳と言った布教手段を通して町人生活に結びつこうとしたと論じた<sup>2</sup>。

ここでの「新たな靈験」とは、庶民生活に即した〈現世利益〉を強調したものであった<sup>3</sup>。そもそも〈現世利益〉とは、宮本袈裟雄氏の定義によれば、「庶民が自らの生活の安穏と種々の目的を達成するために、神仏をはじめとする超自然的存在に訴え、それによって得られた利益」である<sup>4</sup>。そのため、抱瘡除けなら尾張の津島神社、雨ごいや賭け事ならば相模大山、おおやま商売繁盛なら稲荷神など、自らの願いに合わせて複数の寺社の掛け持ちが行われていた。湯浅隆氏は、18世紀後半になると、それぞれの寺社は興行として利益を出すために、出開帳の際にみられる江戸入り道中が宣伝の手段として重視され、衆目を集めるよう派手なものになっていっただけでなく、開帳自体もまた人々の関心をつなぎとめるために、開帳神仏の靈験・縁起・護符の配布に加えて、飾り物や見世物などの、信仰を伴わない行楽の要素の増大が見られたと論じている<sup>5</sup>。

そのため、庶民は娯楽と現世利益をもとめて、寺社参詣を行うようになった。その寺社参詣には、名所見学や温泉観光などの複数の目的を兼ねており、遠方まで旅をするように変化していく。もちろん日帰りでできない遠方寺社への参詣には時間と費用が多くかかり、誰もが気軽に行けたわけではない。この問題を解決したのが「代参講」である。「講」とは、地域（ムラ）や職人たちのグループのことであり、そのグループで旅費を出し合っ  
て籤や持ち回りで選ばれた数名の代表者が参詣に出かけるのである。

このように、非日常性を求める娯楽の発達と庶民層への貨幣経済の浸透がおこり、寺社側では経営のた

<sup>1</sup> 香川正信（2013）『江戸の妖怪革命』19-20頁。

<sup>2</sup> 宮田登（1973）『江戸町人の信仰』。

<sup>3</sup> 木曾御嶽山では、護符の張る場所を（八方位）によって、効果効能を、頭痛・腹痛・頭痛・手足病・口病・熱病・胸病と変えている。1814年（文化11）『江戸神仏願懸重宝記』においても、流行神の効能は身近な病に纏わるものが多い。

<sup>4</sup> 宮本袈裟雄（2003）『庶民信仰と現世利益』4頁。

<sup>5</sup> 湯浅隆（1991）「江戸の開帳における十八世紀後半の変化」。

めに、娯楽的かつ現世利益を強く喧伝するように変化した。そのなかでも、特に頭角を見せたのが三峯山である。

三峯山の最大の特徴は、江戸中期に狼信仰を導入したことだった。狼信仰は、送り狼のような妖怪でもあり、利益をもたらす神でもあり、しかし不可視ではなく実在動物としてのリアリティもあるという非常に重層的で多角的なとらえ方のできる信仰といえる。まして、先に稲荷信仰や狐憑きが流行していたおかげで、肉食動物的ヒエラルキーから、狐より強いオオカミというわかりやすい布教の仕方も可能であり、それが「狐落とし」としての狼信仰や、幕末のコレラ流行に対してもコレラ退散の靈験が期待され、流行神ともなったのである。狼信仰の布教は、三峯山の百姓も兼ねた修験達により眷属札が配られるかたちで行われた。配札範囲は江戸や甲斐、信濃と関東周辺地域に積極的に布教され、これにより継続的な収入を得ることができた。さらに流行神となってからは、靈験をもとめて中部地方<sup>6</sup>などの遠方地域からも三峯山の眷属札が求められた。

このように時代の潮流に巧みに合わせることで、莫大な資産を築き、地方寺院とは思えないほどの寺格上昇に成功した三峯山の経済活動に、本論文では注目したい。

なお、オオカミ<sup>7</sup>を信仰対象とする山は複数存在し、その信仰名称も、「三峯信仰」「御嶽信仰」「御眷属信仰」「真神信仰」「オイヌさま」など様々あるが本論文では「狼信仰」と統一し、山の表記も「三峯山」「三峰山」の両方が一般的に使用されているが、引用部分を除いて三峯山で統一した。また、引用文献の旧字体の一部は新字体に改めた。

## 1 狼信仰導入の経緯

### 1. 1 狼信仰導入時の三峰山の状況

三峯山は、埼玉県秩父市にある妙法ヶ岳・雲取山・白岩山の総称であり、武甲山と両神山と合わせて秩父三山と呼ばれている。現在では狼信仰として有名な三峯神社であるが、神仏分離前は三峯山観音院であった。中世後期には数多くの熊野先達や修験が三峯山を行場としており、熊野権現（本地は十一面観音）が祀られ、1533年（天文2）には聖護院から三峯権現の称号を得ており、山本坊の配下とされた<sup>8</sup>。このように本山派に組み込まれる三峯山だが、天台宗の衰退により三峯信仰も一時期に衰退する。さらに寛文期に三峯山の住職であった龍代・福寿院・一如・覚雄の四人の杜撰な管理ののち、40年ほど無住となり、山本坊に霞<sup>9</sup>が支配されるとの風聞も流れたことから、三峯村民から請われる形で、1720（享保5）年に多宝寺から日光法印が入山した<sup>10</sup>。この日光が狼信仰を始めたと言えられる。

<sup>6</sup> 羽田野敬雄『幕末三河国神主記録』（原題は『萬歳書留控』）によると、安政5年8月20日に、コレラ流行を理由に御眷属拝借している。

<sup>7</sup> 文書におけるヤマイヌをオオカミと同一とみなすか否かは難しい問題であり、そのような名称問題に関しては菱川（2018）やブレッド（2009）に詳しい。

<sup>8</sup> 宮家準（2012）『修験道—その伝播と定着』250頁。

<sup>9</sup> 霞とは、「修験道において、近世期に、その範囲内での配札、檀那の祈祷、霊山の先達、配下の支配を認められた地域。本山派では院家や特に有力な先達は国ごとに、年行事は郡ごとに地域を割り与えられた。そして聖護院は院家、先達、年行事に霞状を発給して、その地域内の配下の本山への位階の仲介などによる支配、配札、登拝の先達を公認した」（『修験道小辞典』46頁）。

<sup>10</sup> 「三峯村名主太右衛門等願書書写」および「三峯山観音院記録下書」（『三峯神社史料集1』20-22頁、6-13頁）。

「三峯山観音院下書<sup>11</sup>」より以下に一部を抜粋する。

当山御眷属之由来を尋るに、昔去ル修験者兩人願望有て秩父郡中老丁毎に山神宮造立せん迎、此山に来る處に、深山靈地最勝也とて、此所に足を止め、秩父の総社として山神宮二社建いたし勸請し給ふ由、是より狼二疋宛雲採山に住し、其の眷属八萬餘疋有之由、人々不思議のおもひを成し、日光法印の代に至て甲州辺にて、悉信仰あつて拝借之札、当代より始ル

日光が三峯山に狼信仰を新しく導入した理由は、当時の三峯山は霞の所有権が以下の表にまとめた通り二転三転しており、安定した霞の収入に頼れなかったことにある<sup>12</sup>。

### 三峯山の霞の所有権の変遷

- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| ・1655 (寛文 5)  | 山本坊から霞の一部を譲り受ける    |
| ・1699 (元禄 12) | 今宮坊に霞の所有権が移る       |
| ・1734 (享保 19) | 三峯山に霞が返される         |
| ・1739 (元文 4)  | 霞を山本坊へ返すことを命じられる   |
| ・1769 (明和 6)  | 白久村を除く七か村が三峯山に返される |

そのため、新しい財源確保のシステムを早急に作る必要があった。そこで、この地域でオオカミ<sup>13</sup>に対して行われていた民間習俗を三峯山の宗教行事の「オタキアゲ」として取り込み<sup>14</sup>、オオカミをシンボルとした狼信仰を始め、〈御眷属拝借システム〉を創り上げたのである。なお三峯地域で元来行われていた民間習俗とは、「産見舞」と呼ばれるものである。また、世間一般的に「送り狼」と呼ばれる伝承が全国的に存在しており、その要素も取り込んでいる。

## 1.2 オオカミにまつわる民間習俗と山の神

狼信仰には、オオカミにまつわる民間習俗や民間伝承が組み込まれているため、狼信仰について述べる前に、この節ではオオカミにまつわる民間伝承である「送り狼」と民間習俗である「産見舞い」について詳しく述べていきたい。

「送り狼」とは、三峯山周辺だけでなく、日本全国に存在する伝承である。人見必大(1642?-1701)の書いた『本朝食鑑』(1697年刊行)によれば「人讐せざれば則ち狼害せず、人善く彼を遇すれば則ち狼亦報ゆるに善を以てす。もし人夜独り山野の幽蹊を行きて狼人見れば、或は後に列を成して随行す。此れ俚俗送り狼と謂ふ。人彼に敵せず、肅み懼れて命を請へば則ち狼亦首を低くして伏し、反つて其の人を護り、盜豺狐狸の害を拒む」と説明されている。夜の山をひとり歩いていくといつの間にかオオカミの気配が

<sup>11</sup> 「三峰山観音院下書」は当山の由緒にかかる要項をかきつけたもので、「当山大縁起」に先行するものである。書かれた時期は記載されていないが、最後の記述が3代目日照の隠居であり1774年(安永3)のものであるため、それ以後と考えられる。

<sup>12</sup> 『三峰神社史料集1』。

<sup>13</sup> ニホンオオカミは既に絶滅しており、1905年(明治38)奈良県鷺家口で捕獲された若い雄狼が最後の記録である(上野, 1969) 絶滅原因は新田開発による餌の減少・狂犬病に感染したオオカミの狩猟、開国後のジステンパー感染、純血種の消滅などが複合的に絡み合っている。(遠藤, 2008)および(千葉, 1995)。

<sup>14</sup> 『新編武蔵風土記稿』(巻の264)「三峯山」の項には「此山犬のことを於犬とよべり、毎月十九日に寺より白米一斗五升づゝ炊て、山の内なる兼て設ある仮屋に出して興ること、古より今も替らず、又子を乳するときは、産立とて酒赤飯などを興て、最も大切にすと云り」とある。

あり、家に帰るまでずっと後を付けられるというものである。この送り狼には、オオカミに襲われるものやオオカミがむしろ護ってくれるものなど数々のストーリー展開の派生があり、『日本俗信辞典』に挙げられている例<sup>15</sup>や菱川晶子氏による『狼の民俗学<sup>16</sup>』に収集された伝承の要素を簡略的にまとめると、以下のようになる。

- ① オオカミは転倒した人間を食べようとするので、転んでも「休んだ」と言えば襲われない
- ② 腰に長い紐状のもの（綱・帯・禪）を引きずって歩いていると襲われない。
- ③ 襲うときは頭上から飛び掛かるため、頭の上に、金属の簪、刀などを立てておく
- ④ 煙草・松明・提灯などの火を持っていると襲われない
- ⑤ 家まで着いてきたオオカミに対して、お礼し、何かしらの物品（餅・塩<sup>17</sup>・草履の片方・小豆飯など）を差し出す

これらの伝承に対して、平岩米吉氏は「狼が人のあとをつけるということだが、これは、じっさいその通りなのである。ただし、それは人を襲うという目的からではない。自己の領域内にはいつてくるものを多少の好奇心をもって監視しながらついて歩き領域外に出るまで送ってくるのである」と述べており<sup>18</sup>、オオカミの縄張り意識と好奇心の強さがなす習性と、人間側が山を歩いているときの恐怖や、オオカミによる実害が相まってこのような伝承が発生したと考えられる。恐怖の対象に対して供物を捧げる風習は疱瘡神への信仰にも通じるところがある。また『日本書紀』欽明天皇即位前記の秦大津父伝説<sup>19</sup>にみられるような狼の報恩譚も各地に散らばっており、オオカミに対して両義的な思想が当時の人々にあったことも伺える。

「産見舞」とは冬の獲物が取れない時期やオオカミの出産時に、オオカミへ供物を捧げて、人間や牛馬などの家畜に危害を加えないように祈願するものである。捧げられる供物は地域によって異なり、赤飯・塩・酒・洗米などがある。このような儀礼は三峯山周辺以外でも行われており、例えば愛知県の大鈴山では、狼が出産していた岩の間に塩を混ぜた赤飯を置いている<sup>20</sup>。また菱川晶子氏は、岩手県上閉伊郡大槌町における「オイノ祭り」について聞き書きしており、ここではオオカミに供物を捧げることで、人間や牛馬などの家畜に危害を加えないように祈願する儀礼であると伝えている<sup>21</sup>。

このような野生動物に対して供物を捧げる習俗は、オオカミだけに行われるのではない。吉野裕子氏は近畿地方から中国筋において、寒中に狐に対して食物（赤飯・油揚げなど）を供物する「狐施行（もしくは

<sup>15</sup> 鈴木棠三（2020）『日本俗新辞典 動物編』173-176頁。

<sup>16</sup> 菱川晶子（2018）『狼の民俗学』第二章「狼と民俗信仰」。

<sup>17</sup> オオカミが塩を好むという伝承は多く残っており、狼信仰を掲げる寺社では塩が供物にされることもある。（平島, 1973, 22-24）（菱川, 2018, 164-167）。

<sup>18</sup> 平岩米吉（1992）『狼—その生態と歴史—新装版』187頁。

<sup>19</sup> 秦大津父の狼の報恩譚とは、欽明天皇が「秦大津父を寵愛せよ」という旨の夢をみたため、本人にその理由を尋ねたところ、伊勢で商売をした帰り道で、二足のオオカミが血まみれで喧嘩をしていたので、大津父は馬から降りて口手を洗ってから、その狼たちに『汝は 貴神であり、このままでは狩人に捕られてしまう』としてオオカミ達の争いを止め、その傷を洗ってやったと答えたというものである。天皇の夢の啓示はオオカミの報恩であったというもの。

<sup>20</sup> 夏目善吉「山の犬の話」『設楽 13』（昭和10 発行）この記事では、他にも狼が塩を好む話や、落とし穴に落ちたオオカミを助けたところ恩返しされた報恩譚などの民間伝承が紹介されている。

<sup>21</sup> 菱川晶子（2018）『狼の民俗学』278-287頁。

は寒施行)」を稲荷信仰に基づくものであるとしている<sup>22</sup>。狐が稲荷の眷属<sup>23</sup>とされているように、三峯山におけるオオカミも、山の神<sup>24</sup>の眷属という位置づけであった。

なお、三峯山の縁起は、『當山大縁起』と、1698(元禄11)に作成された『當山縁起大略』の二種類が存在する。『當山大縁起』『當山縁起大略』<sup>25</sup>の文章構成はほぼ同一であるが、『當山大縁起』には狼信仰が盛り込まれていることから、日光入山の1720年以降の成立だと考えられる。以下に、狼信仰に関する該当箇所を掲載する。

『當山大縁起』(下線部は筆者による)

是山王ハ大山祇命にして、則山神也、山神元來氣の勇猛を以、撰て是を使者とす、依之当山に詣して擁護を祈輩ハ、神前に誓て狼を借、其家を防て其の身を安んずる事、靈験挙て數ふるに不遑、是万人の在る處也、禽獸を以使者とすること也、本朝諸社において其例多、見聞の人ハ筆を下すを不可待、故ニ諸侯は勸請のいにしへを仰ひて、武運の全事を祈、町家は狼を借て賊難を防かん事を乞、庶民は五穀の成就を頼て、猪鹿風雹の不時の災難をまぬかれん事をこひねかいて、日々參詣の人々、廣前に成市といへとも、各々誓の御手にすがりて、慈眼視衆生。福寿海無量の功德に預らすといふ事なし

この『當山大縁起』の記述はそのまま『新編武蔵風土記稿』(1810-1830)に採用されている。つまり、狼信仰を創出したことにより、縁起を書き直す必要が生じ、新しく作成したものであると考えられる<sup>26</sup>。言い換えれば、狼信仰および後述する〈御眷属拝借システム〉はそれだけ三峯山経営の根幹を担うものであったといえる。

また、新しく創出した狼信仰と、それ以前に行われていた信仰とが対立せずに共存できたことには理由がある。三峯山周辺地域では、1629年(寛永6)荒川が付け替えられて以降、秩父地域と江戸が直接結び、17世紀中期には江戸の木材供給圏に組み込まれることとなった。三峯山山麓の大滝村では、重要な山林資源を守るために集落が結束し、大滝村全体の象徴として三峯山<sup>27</sup>が祀り上げられることとなったという背景があった<sup>28</sup>。元々の木材伐採に関わる山の神信仰があった中に、オオカミがその眷属と位置付けられることで、旧来の三峯信仰と新しい三峯信仰が対立することなく融合でき、地域住民たちにも受け入れられやすかったと考えられる。

## 2. 狼信仰と眷属札

### 2.1 御眷属拝借システム

三峯山に狼信仰を導入したのは日光法印である。日光は狼信仰を生かした新たな収益システムである御眷

<sup>22</sup> 吉野裕子(2007)『吉野裕子全集 4』237-239頁。

<sup>23</sup> 稲荷神と狐の習合に関しては中村禎里(2017)『狐の日本史』に詳しい。民間習俗的な狐施業の場合、供物を狐が食べるかどうか、またいつ頃食べたかによって、今年の稲の豊作を占うという地域も存在する。

<sup>24</sup> 山の神は女神とされることも多く、また地域によっては山の神=産神となる場所もあり(佐々木, 2006, 56-60, 171-172)、山と産見舞いの関連性は深いと考えられる。

<sup>25</sup> 『三峯神社史料集1』1-6頁。

<sup>26</sup> 同じく狼信仰を掲げる武州御嶽山も、『新編武蔵国風土記稿』の前後で縁起を書き換えており、その際に狼信仰が新しく盛り込まれた(斎藤, 1993)。

<sup>27</sup> 象徴としての三峯山があったからこそ、三峯山の荒廃や住職不在に対して周辺住民は立て直しとして外部から有力者を招こうとしていた。日光入山前の1718(享保3)には、聖護院門跡に対して法養寺の元良の後住願いも出している(『三峯門前百姓連署願書控』『三峯山史料集1』)。

<sup>28</sup> 三木一彦(2010)『三峯信仰の展開と地域的基盤』55-66頁。

属拝借を始めた。その中心となるのが御眷属札である。現在でも護符として三峰神社で配られており、三峯神社の文字の下に、二体のオオカミの姿が印刷されている。



図版 現在の三峯山神社護符  
三峯神社発行 埼玉県秩父市  
20.2 cm×9.7 cm  
撮影者 川田大晶

この御眷属札の特色は、『當山大縁起』にも書かれている通り「狼を借りる」ということである。一年おきのお札交換（オオヌ替え）と守護できる範囲が規定されている。眷属札は箱に収められており、オオカミの分身であるとされ、一「枚」ではなく一「疋」と称して貸し出され、一疋につき約50戸の範囲を護ると設定されている。なお実際のオオカミの縄張りの範囲は被捕食者の密度や地理的条件、人間の捕獲圧力によって決定され、北米のオオカミであれば80-2500 km<sup>2</sup>であり、ヨーロッパのオオカミは通常100-500 km<sup>2</sup>である<sup>29</sup>。このように札の効力範囲を具体的に示すことで、講の大きさによって札数を増やすことができる。さらに札は「御眷属箱」に納められた上で貸し出されるが、その箱には小さな穴がついており、オオカミが呼吸するための穴であると説明される<sup>30</sup>。このような実在のオオカミの習性を取り込むことで、人々は自身もつオオカミのイメージと靈験を重ねやすくなる。目に見えない神を信仰することに比べ、現実的

で実態的なオオカミに引き寄せることで、オオカミの札の効力により一層の説得性を持たせている<sup>31</sup>。御眷属拝借に関しては、随筆にも書かれるほど有名であり、ここではそのうちの一つを紹介する。

『耳囊 卷之三』（1784-1814）（下線は筆者による）

武州秩父郡三峯権現は、火難・盗難を除脱し給ふ御神にて、諸人の信仰いちじるし。

右別当は福有にて僧俗の家従・隨身夥しく、無頼・不当の者にて今日たつきなく歎きて寄宿すれば差置ける由。多くの内には盗賊などありて、金銭など盗取りて去去んとするに、或は乱心し或は腰膝たたず不立、片輪などになりて出る事不叶。住僧は勿論隨身の僧俗も、右在山の内金子を貯出んとするに必、崇りありて、一銭も持出る事叶はず。酒食に遣い捨る事は強て咎めもなきよし、彼山最寄の者語りぬ。且又右三峯権現を信じ盗難・火難除の守護の札を附与する時、犬をかりるといふ事あり。右犬を借る時は盗難火難に逢う事なしとて都鄙の申習し事なり。

或人、「犬をかり候といえど札を附与斗也。誠の犬をかし給う事もなるべきや。神明の冥感目にさえぎる事を」頼みければ、別当得其意祈念して札を附与なしけるに、彼者下山の時一つの狼跡へ成先へ成附來る故、始めて神慮の偽なきを感じ、狼を伴い帰らんの怖しさに、立帰りてしかゞの訳をかたり、「疑心を悔て札斗受けたき」願いをなしける故、別当また其趣を祈りて附属なしければ、其後は狼も目にさえぎらずありしとや。

ここでは、御眷属札を所持していると気配を感じるという、「送り狼」伝承にもみられる恐ろしいオオカミの気配が、靈験あらかたである証拠というポジティブな評価に置き換えられている。また同じ記事内に、右別当（三峯観音院）が裕福であり、その金銭を盗もうとする者もいるが、しかし実行しようとすると乱心や足腰が立たなくなるなどの祟りがあるため出来ないという記載もある。靈験の強さだけでなく、18世

<sup>29</sup> 亀山ら（2005）「オオカミ（Canis lupus）の保護管理及び再導入事例について」。

<sup>30</sup> 川田（2020）「近世における三峯山参詣の実態と特質—一代参講—山組織に注目して」。

<sup>31</sup> そのため、生の眷属という言い方も存在している。

紀終盤には、既に三峯山の資金力が広く知られていたことがわかる資料でもある。

## 2.2 眷属札の多彩な霊験

布教の際に期待される御眷属札の霊験には、地域や時代に合わせてさまざまなものがあつた。この節では地域や時代に合わせて、どのような霊験が語られていたかについて述べていく。

新田開発エリアでは「猪・鹿除け（四つ足除け）」が期待された。それまで森林だった場所が開拓された場合、その地に生息していた猪や鹿が田畑を荒らしてしまう。そこで、オオカミと猪・鹿の捕食者-被捕食者の関係性から、農村地帯には猪鹿除け（四つ足除け）としての効果がうたわれていた。それを裏付ける史料を横山晴夫氏が提示している。1754年（宝暦4）に秩父から遠く離れた下総国印旛郡へ御眷属拝借したその史料には、これまで毎年代参者が三峯山に登拝し御犬（御眷属）を取り換えていたが、この度より名主の取次をもって永拝借、永氏子となり、猪鹿除・盗賊除のお札を毎年お願い、家の数については年々に申し上げることになったと記されている<sup>32</sup>。そこから、三峯信仰は1754年時点で既に毎年山に登るほど厚く信仰されており、また地域的には千葉県まで広まっていたことや、家数によってお札の必要枚数が異なることが理解できる。

秋田県の狼害の多かった地域では、「狼除け」として三峯信仰がなされていた。『旅と伝説』では、三峯神へ奉納した絵馬を狼犬塚と呼ばれる自然石の上に置いてくる風習や、山を歩く際にオオカミに襲われないためのまじないとして『三峯さん』と三篇唱ふべし」という「狼犬の寄れぬ法」や、「小白川には三峯さんが祀っており、その神を祀る場所の狼は人を寄せぬものと信じられてゐる」との記事があり<sup>33</sup>、獐猛なオオカミの被害を、オオカミ信仰で有名な三峯山の信仰で抑えようとしている。オオカミは群れで行動する習性があり、より強い三峯のオオカミを借りてくることで、地域のオオカミを支配し統率してもらおうと考えたのかもしれない。

養蚕業従事者には「鼠除け」が期待された。秩父では農家の副業として養蚕業が盛んであり、秩父絹は江戸でも有名だった。秩父絹の名称は『絹布重宝記』のなかにも、以下のように記されるほど、秩父の重要な産業の一つになっていた。

「秩父絹手印」

関東秩父より織出す也。加賀と秩父は遣口多端なり。出る絹なり、絹の性ぬき勝ちにて、地合むさくろし、表地にはなりみくし、裏絹なり、絹性はねまりなき方也、幅廣狭あり定らず、乍然全體地太きゆゑ強し、そめ附は御納戸茶別てよし、もえぎはんなりとせず、黒は一向にあし、上布はなかほどにあり、尤買廻し當也、耳は細し。

ここで興味深いのは、根古屋絹という地方絹は評判がよいものであつたが、大阪にて根古屋絹として売られているものは皆秩父絹であると書かれている。そのほかの地方絹も、秩父絹と比べてどうであるかという書かれ方をしており、秩父絹が広く普及していたことが伺える。その興隆期は1770年（明和7）とされる。秩父絹は、養蚕—製糸—絹織までを一貫した家内手工業によって生産するのが特徴である<sup>34</sup>。養蚕業

<sup>32</sup> 横山晴夫（1979）「本山派修験三峯山の交流」。

<sup>33</sup> 武藤鐵城（1936）「狼犬の話」。

<sup>34</sup> 平野哲也（1996）「秩父絹の生産と流通に関する一考察」。



を営むうえて天敵となるのは鼠であり、蚕の卵、幼虫、繭のすべてを食べてしまう鼠害に対して、三峯信仰の四つ足除けが適用された<sup>35</sup>。『十方庵遊歴雑記』では養蚕業者に三峯信仰が人気だったことを裏付けている。以下は『十方庵遊歴雑記』の著者である津田大浄（字は敬順）が、1816年（文化13）5月に三峯山を訪れた際の記述である。（下線は筆者による）

予が止宿せし夜は取分旅人少なく、上下の座敷にてわずか纒三拾壹人ありしとぞ、込合ときは七拾人八拾餘人に及ぶ事もありとなん、當時は蠶にて田舎いそがしき故大に少なしとぞ、これらの人にみな心願ありて、一兩人づゝ参詣して止宿する事かくの如し

ここから当時の人々が、蚕の繁忙期ではない時期に多く三峯に参詣していたことがわかる。なお大浄は地主の代参として三峯山を訪れており、以下のように、彼自身もまた御眷属を借りて、さらに札の購入もしている。

御犬の箱より封じたる者取出し是を返納し、又改て御犬三疋拜借申度はしと申込、金子壹兩貳分を投げ外に火防の札何十枚、鼠除の札悪犬除の守いか程と申入れば（略）

ここでも「御眷属拜借システム」のとおり、お札を返納した後に、新しいお札（御犬三疋）と交換している。加えて、ここでは多彩な靈験も伺える。なお、「悪犬」とは、狂犬病に感染した犬である。文献によっては「病犬」とも呼ばれている<sup>36</sup>。

そして、秩父絹や木材の流通によって、秩父地域と江戸の交流がすすむことで、三峯信仰は江戸の町でも信仰を拡大していく。

江戸において期待された靈験は、「盗難除け」と「火難除け」であった。それらは江戸後期の随筆などにも見え、伴信友「しるしの杉追加」（『嚶々筆語 二編』収録）にも、「又武蔵国秩父群三峯山に、三峯神社あり。その山に狼いたく多し。これも其神に祈請ば、狼来りて猪鹿を治め、又その護符を賜りてある人は、その身殃害に遭ことなく、又盜賊の難なしといへり」とある。江戸では、既に愛宕山や秋葉山が火難除けとして信仰されていたが、そこへ三峯信仰が加わる形となった<sup>37</sup>。その理由を三木は二つ上げている<sup>38</sup>。一つは秩父の山と江戸の位置関係と火災との関係である。冬季の乾燥した気候と北西からの季節風が火災の元凶であり<sup>39</sup>、この風向きと秩父の山との連関が三峯山への火難除けの信仰と結びついた。人口密集地域では火災は深刻であった<sup>40</sup>。もう一つは、火災の発生が儲けに繋がるために、火事を待望するかに言われてしまいがちな材木屋は、世間の目を否定するため、免罪符的な役割を期待して、三峯の札を火難除けとして求め、また三峯山へ多額の寄付を行った。

このような靈験の変化は、三峯信仰が農村型から都市型へと変化したことと関連が深い。宮田登氏は「江戸は単純に考えて、都市社会の形成された地域社会であるから、当然ムラ社会とは異なる現象が生じてい

<sup>35</sup> 鼠の天敵はオオカミだけではないため、地域によっては猫や蛇、狐、ムカデなども信仰されていた。江戸時代の稲荷流行の理由のひとつには、養蚕業の関連性もあったと考えられる。

<sup>36</sup> 1736年（元文元）頃から、江戸では狂犬病の流行がみられていた（源, 2007）。

<sup>37</sup> 秩父地域では火難除けに関しては既に愛宕信仰や古峰信仰があった（三木, 1996）。

<sup>38</sup> 三木一彦（2010）『三峯信仰の展開と地域的基盤』147-148頁。

<sup>39</sup> 大石慎三郎（1977）が、『武江年表』より算出した江戸の月別火災比率は、11月（11.5%）12月（18.07%）1月（19.92%）2月（16.22%）であり、3-10を合わせた比率が（14.99%）である。

<sup>40</sup> なおオオカミが息していない茨城県海沿いの漁村である平磯でも、家屋が密集しており火難除けとして三峯神社が勧請されている。火難除けなどの現世利益として狼信仰が求められていることの証左であり、オオカミが概念化していたといえる。

るはずである。端的には人口密度の集中があるわけで、そのことは信仰内容にも特色を示させている。三峯の靈験が盗難と火難に代表されているのは、それが江戸という地域社会の住民たちによってより多く期待されたからであった」と述べている<sup>41</sup>。

さらに江戸庶民に狐憑きが流行してくると、三峯の靈験に「狐落とし」の効果が与えられた。中村(2020)は「僧侶・修験者・陰陽師いずれも、一七世紀半ばから一八世紀にかけて、状況に大きな変動がありそれにともなって、祈祷的な活動が盛んになる」とし、さらに「下級宗教者の一部が狐落とし、場合によっては狐付けに参入していたことは疑いなく、彼らの活動は近世、とくに中期以後活発になっていったと推定される」と述べている<sup>42</sup>。『耳囊』などをはじめとする随筆だけでなく、日誌の類にまで狐憑きにまつわる記述がある。そして狐落としとして使用される護符に、「狐」の文字を囲むように「犬」の文字が使われ、薬として狼の毛を飲ませるなどの民間療法が行われた。

『神拝祭式 加持祈祷神伝』「狐憑を放す法」にも

由来狐と犬とは其性氣相反せるものにして、四國に狐憑なきは全く彼國に犬蟲あるによるなり、また狐の居る國には犬蟲なしと傳ふ之により方術者は狐憑に犬の牙を粉にしたるものを素湯にて吞ましむる時、犬の牙を懐に入れしむ若し狐憑之太く厭ふこともあるも強て此法を行ふときは三回を出でずして狐憑必ず去るものなり。實に不思議の妙法と謂ふべし

とあり、狐の天敵が犬であるため、加持祈祷に用いられていることが伺える。同記事には、稲荷大神の勸請文を読みながら、狐憑きの背中に、犬と三回書いて背中を打つ方法が記載されている。なお、オオカミ頭骨そのものも、同様に狐憑きに効果があるとされ、枕元に置いての祈祷や頭骨を削って吞むこともなされていた<sup>43</sup>。

そのうえ、幕末期に感染症であるコレラが流行するようになると、「コレラ除け」という新たな靈験が期待され、信仰を爆発的に集めるようになる。長く続いた鎖国状態が終わり開国すると、異国船がやってくるようになり、1853年(嘉永6)に長崎に寄港したミシシッピ号から到来したコレラが日本全国で爆発的に流行した。それと前後するように、地震・津波・暴風雨などの自然災害が頻発していた。さらに、1858年(安政5)は酷暑だったという記録もある。このような天変地異と政治の混乱は、人々を不安とパニックにさせやすかったと考えられる。古来より、日本では疫病は鬼神がもたらすものとして、神仏の力に頼っていた。この時のコレラも、アメリカ狐が流行らせたという噂がたっていた。感染するところろとすぐに死んでしまうことから、一日コロリという呼び名も広まり、そのコロリには「狐狼狸」という字が当てられ、妖怪化していた。また未知の疫病に対して、狐憑きと結びつけた噂も広がっていた<sup>44</sup>。コレラ患者の体にできたこぶは、管狐が体内に侵入したものだという妄想につながった<sup>45</sup>。このような混乱から、四つ足除けや狐憑きに効果があるとされていた三峯山には、コレラ除けの靈験も期待された。関東以外の地域からも札を求める人が訪れ、また三峯を勸請する地域が多発し、1858年(安政5)には御眷属が一万以上拝借された。

<sup>41</sup> 宮田登(1993)『山と里の信仰史』285頁。

<sup>42</sup> 中村禎里(2020)『狐付きと狐落とし』285-286頁。

<sup>43</sup> 植月学(2008)「甲州周辺における狼信仰—笛吹市御坂町に伝わるニホンオオカミ頭骨をめぐる一—」。

<sup>44</sup> アメリカが送ってきた「アメリカ狐」という呼ばれ方以外にも、千匹モグラ、イギリスが送った疫鬼、オサキ(狐の憑きものの一種)など動物に関連したものが多い。

<sup>45</sup> 高橋敏(2003)「幕末民衆の恐怖と妄想」のなかで、コレラによりパニックになる様子を記した『袖日記』を分析している。

### 2.3 三峯講の状況

前述のように、御眷属札は地域や時代に合わせて多彩な霊験が語られていた。御眷属札は三峯山の百姓も兼ねた修験達により<sup>46</sup>、江戸や甲斐、信濃と関東周辺地域に積極的に布教され、これにより継続的な収入を得ることができた。三峯山は秩父の奥山にあるため、この御眷属札を求めて各地に三峯講が作られていった。一般的な代参講では、山岳に所属する御師などの宗教者の強力な介在があって講が作られるが、三峯講は山岳側の一方的な布教ではなく、個人祈願の対象としての流行神として、町人達側からの積極的な宗教行動の結果生じていた<sup>47</sup>。御眷属拝借数も1817年(文化14)には四千を超えて、それ以後も右肩上がりに増えていった<sup>48</sup>。

年号	御眷属数	備考
1817 (文化 14)	4000+	12月5日 4000 達成
1825 (文化 25)	5000+	12月2日 5000 達成
1840 (天保 11)	7410	大晦日参籠者 188 人
1858 (安政 5)	10000+	8月24日 10000 達成
1868 (明治元)	12573	
1912 (大正元)	25835	
1940 (昭和 15)	28911	

三峯講は、先に述べたように、1754年(宝暦4)の時点で、印旛沼周辺から猪鹿除けとして御眷属拝借する史料があり、さらに江戸の町では、ムラ単位ではなく、商人などの職業集団が講を作っていた。1780(安永9)には、伊勢屋・大黒屋が講頭となった二十人の講で、金二十両二分を二年に分割賦奉納した記録が残されている<sup>49</sup>。1811年(文化8)の「檀廻記」<sup>50</sup>では、紀州徳川公の江戸屋敷に始まり、質屋・紙屋・呉服屋・酒屋・湯屋などの商人、下駄や左官・傘などの職人に札が渡されているだけでなく、氷川本覚院などの寺社にも札が配られているところが興味深い。

また三峯山の信者には、木材生産の盛んな大滝村や絹市が開かれる下吉田村などがあり、商業中心地のため寄進額も大きく、大滝村では1803(享和3)の一年間で672両にも上っている<sup>51</sup>。このように、三峯山の霊験ある御眷属札を求めて多くの講が作られ、御眷属札の売上や寄進額も増え、三峯山は莫大な資金力を獲得していったのである。

<sup>46</sup> 1739年(元文4)の際に、山本坊へ霞が譲渡される際には、山本坊配下に組み入れられることを拒否した里修験が還俗するという手段を訴えた(西村, 2009)。この事例からも三峯信仰を中心に据えた三峯グループとしての結束がみえる。

<sup>47</sup> 宮田登(1993)『山と里の信仰史』291-292頁。

<sup>48</sup> 横山晴夫(1980)「三峯信仰とその展開」。

<sup>49</sup> 同上。

<sup>50</sup> 『三峯神社史料集2』。

<sup>51</sup> 三木一彦(2010)『三峯信仰の展開と地域的基盤』69-70頁。

### 3. 狼信仰による観光地化と地域活性

#### 3.1 三峯山組織

狼信仰を導入して以来、信者を増やし、資金力を得てきた三峯山には、その運営組織にも特色があった。西村敏也氏は「三峯山では地方霊山のように先達から御師へ至るといふ歴史的段階を経ていないため、御師の発生がなかった。しかし別当の配下の役僧が、祈祷や檀廻・配札、講中の産廃時の接待、参詣者の宿泊は自山の宿坊である客長屋で受け入れるなど、御師的機能を分掌して対応していた。そのため特に客長屋では多くの労働力が必要とされ、職務を執行するため多くの人々を抱えていたのである。以上のように、地方霊山における御師の機能を三峯山は自己完結的に保持していたのである」と述べている<sup>52</sup>。このように三峯山では、修験達が御師化せず、山上を頂点とした、いわば<三峯グループ>ともいえる組織形態をとっていた<sup>53</sup>。そのリーダーシップをとっていたのが日光の流れを組む観音院であった。

<三峯グループ>は檀廻・配札を担う宗教身分社と、講の接待や宿泊・飲食を担当する俗人身分とで運営されている。三峯山の組織は、当主・役僧・弟子・隨身僧（護摩僧）・奥近習・札場・中の間・勝手・子供・下男世話人・日雇世話人のおよそ50人で構成されていた<sup>54</sup>。なお、札場とは護符を授与する者であり、中の間は講や代参者の接待や宿泊を担当し、勝手が飲食の担当をし、その他の雑用は下男や日雇いが行っていた。

また、三峯山は三峯講に対しても成文化した規約である「御眷属拝借心得」を通達していた。同様の内容のものは「御眷属拝借指南書」など、何度も講に対して通達されており、<御眷属拝借システム>のルールを徹底させていた。このように三峯山は、狼信仰を基に<三峯グループ>として結束し規則を明確にすることで、内部の権力争いを防ぎ、安定した運営を行っていた。

#### 3.2 観光地としての三峯山と地域活性

また、多くの講が訪れるようになった三峯山は、その資金力をもって、信者が通るための山道や橋を整備した。特に武州から雁坂峠を通り、甲州山梨へ抜ける街道は、三峯山への参詣道であり、秩父絹の輸送路でもあったため重要だった<sup>55</sup>。なお三峯山参詣は、旅を兼ねた寺社参詣のひとつのルートとなり、秩父巡礼と同時にも行われることもあった。

さらに三峯山上では、講員をもてなすための設備も充実させていった。『新編武蔵風土記稿』によれば、三峯山には堂や社だけでなく、参詣者を止宿させる長屋があることが確認できる。

三峯山内の参詣者をもてなすシステムについては、『十方庵遊歴雑記』（1816）の以下の記述が参考になる。（なお、下線部は筆者による）

御犬の箱より封じたる者取出し是を返納し、又改て御犬三疋拜借申度はしと申込、金子壹兩貳分を投げ外に火防の札何十枚、鼠除の札悪犬除の守いか程と申入れば、彼寺侍等一々着帳し、江戸講中何町誰々何人と相記し、予は地主の代参なれば町家の隠居と披露し、地主よりの初穂の銀封納めぬれば、

<sup>52</sup> 西村敏也『武州三峯山の歴史民俗学的研究』94頁。

<sup>53</sup> 修験者たちの忠誠心は強く、霞の支配権が三峯山から山本坊に移るといふ旨が通達された際に、三峯配下でいられないならば還俗（修験者を辞める）するというほどであった。「三峯山配下霞関係文書」（『三峯神社史料集1』）。

<sup>54</sup> 西村敏也『武州三峯山の歴史民俗学的研究』92頁。

<sup>55</sup> 同上第7章。

それぐに取調記帳して僕を呼、洗足の湯及び二階何番の座敷へご案内申すべしと命ず（中略）湯殿にいたるに、實に錢湯のごとく銘々脱捨て置る棚三段に鉤て、流水の板の間廣く、風呂は箱の戸棚風呂にして大きき壹間四方、聞ければ戸を明、寒ければ戸を引、中に腰掛けありて上方の錢湯の如し（中略）調理の菜數は一通りにして爲差事ならねど、かゝる深山の頂上 蕨山獨活の外はあるまじきに、去<sup>さり</sup>連<sup>とて</sup>は野菜の取合わせと<sup>さしたる</sup>いい調味の下限、江戸にかはらねば<sup>わらびやまうど</sup>感心のあまりに詰す事左の如し

上記のように、料理や温泉に『十方庵遊歴雜記』の著者も大満足している様子がうかがえる。信仰と観光の融合が進展していた近世後期において、秩父の山奥であるにもかかわらず、充実した設備を整えることができたことも、またその資金力のなせる業であった。このように三峯山全体としての観光地化・名所化が進んでおり<sup>56</sup>、山麓の村人たちも共同して三峯山の観光地化・名所化に励んでいた<sup>57</sup>。三峯講は参詣の際には、山上の宿泊施設に止宿しており、三峯神領の百姓たちは、祭礼時に労役の提供は行うも、参詣者の宿泊はさせなかった<sup>58</sup>。

勿論、観光地化や参詣者の増加には負の側面もあり、施行を求めている乞食の増加、行き倒れの処理、無住の寺への住み着き、寄付金詐欺が集まるなどの治安の悪化がみられ、地元住民とぶつかることもあった<sup>59</sup>。

そのため、三峯山は周辺住民の福祉にも力をいれており、日光から数えて七代目別当の日俊は、享和年間（1801-1804）に、東国で広がっていた生活苦からの間引きの悪習に対して、自身が存命中は毎年錢三百貫文を差し出すこととし、これによって秩父郡だけでもその悪習を阻止することを願った<sup>60</sup>。同じく日俊は神領内の老人十八人に対して扶持米を贈っている<sup>61</sup>。

#### 4. 三峯山の寺格上昇

三峯山は豊富な資金力をもって、山主の僧位昇格や、三峯山観音院の寺格上昇を行っていった。

狼信仰を始めた日光以後、三峯山山主の観音院別当は以下のように継続し、大僧都や権僧正も複数輩出している。

- |          |      |      |      |      |      |      |
|----------|------|------|------|------|------|------|
| ①日光      | ②日恵  | ③日照○ | ④日翁○ | ⑤性懂  | ⑥日高○ | ⑦日俊◎ |
| ⑧日雅（観雅）◎ | ⑨観巍◎ | ⑩観深  | ⑪観宝◎ | ⑫観禅◎ | ⑬到阿○ |      |

※○=大僧都 ◎=権僧正

三峯山観音院は、天台宗本山山派の寺院でありながら、日俊までは真言宗智山派の多宝寺から、日雅（観雅）以降は智積院から住職を迎えていた。智積院から迎えるようになると三峯山の方針は秩父よりも京都という中央に向けたものとなる<sup>62</sup>。このように宗派に捕らわれず優秀な人間を別当に招き、経営手腕を発揮

<sup>56</sup> 湯浅（1991）よれば「近世中期以降になると、遠隔地の寺社であっても、靈験のあるとされた一部の有力寺社の場合、御師による札の配布・道中記や縁起類の版行、末社の勧請、旅人の評判などのより、居ながらにして知名度をあげることは可能となる」とある。近世中期後期の参詣ブームでは随筆などで三峯山が紹介されることもあり、観光目当ての講の増加も大いにあったと考えられる。

<sup>57</sup> 神領には茶屋も存在していた。

<sup>58</sup> 『三峯信仰の展開と地域的基盤』32-33頁。

<sup>59</sup> 「麓八ヶ村名主施行差控願書」（『峰山史料集5』）など。

<sup>60</sup> 「観音院日俊願書」（『三峯神社史料集5』）。

<sup>61</sup> 横山晴夫（1979）「本山派修験三峯山の興隆」。

<sup>62</sup> 西村敏也（2009）『武州三峯山の歴史民俗学的研究』50頁。

せしめた三峯山は、莫大な資金力をもって、寺格上昇のため京都の貴族や江戸幕府ともコネクションを強めていった。

#### 4.1 花山院家との猶子関係と院室

当時、寺格上昇のために、いわゆる殿上人である上級貴族（堂上家）と猶子関係を結ぶという風習があった。そして七代目の日俊は1809年（文化6）には花山院家との猶子の縁組に成功している。猶子関係を結ぶにあたって、花山院家からは三峯山の財力を問う「花山院家猶子成式記」<sup>63</sup>が渡されている。以下はその書付である。

御太刀一腰、御馬代銀二枚、昆布一箱、御樽代金五百疋右後家内江、御扇子料金二百疋、御樽代金三百疋右中納言御方、御扇子料金三百疋右嘉君御方。金三百疋宛諸大夫四人、同二百疋大夫一人、同二百疋申次諸大夫、同百五十疋宛雑掌兩人、同百疋宛元締役二人、南鐮一片宛御近習六人、白銀一両宛外様兩人、金百匹千とせとの、南鐮一片玉井との、白銀一両宛女中五人、鳥目三百文仲間一人、同一貫二百文下部門番、同二百文宛下女兩人 以上

また、これ以外に、「年始、暑中、寒中ごとに金百疋。御拝賀、御元服、御婚礼などの節には金三百疋」などの覚書きが渡されている。これを承諾し、上記の献上物を用意した日俊は、晴れて花山院の猶子成就となったのである。なお花山院家への献上物は金十三兩二朱と錢四百八十文を要した<sup>64</sup>。この後1812年（文化9）に日俊は三峯山観音院別当として初めて、権僧正に昇格し、紫衣緋衣が許されており、おそらくこの猶子関係が有利に働いていたと考えられる。この猶子関係により、三峯山は、山本坊と争っていた吉田坊の霞の所有権も、永世三峯山支配とすることに成功した。

また八代目の日雅も、1819年（文政2）に花山院家と猶子関係を結んだ<sup>65</sup>。彼は1821年（文政4）には権僧正になると同時に、院室にまで昇格した。院室とは門跡寺院を補佐する院家に次ぐ格式である。門跡寺院と院家は皇族や貴族が住職を務めることを踏まえれば、地方寺院である三峯山がそれらに次ぐ格式を持つことは破格である。これも花山院家との猶子関係と関係者への献上物及び御礼金の大きさによるものと言える<sup>66</sup>。その後も花山院家との猶子関係は続き、三峯山の地位は不動のものになっていった。

#### 4.2 江戸城へののりこしどくれい乗輿独礼

1816年（文化13）に、日俊は新年登城の際にのりこしどくれい乗輿独礼も行った。これは正月に寺社が將軍へ新年の挨拶を行うものであり、それまでの三峯山は複数の寺社が一斉に挨拶する惣礼席であった。しかし1816年には単独で挨拶することが許され、さらに挨拶に江戸城へ向かう際に輿に乗ることも許されたのである。これには触頭<sup>67</sup>である大乘院が三峯山に金百五十兩を借用するかわりに、日俊へ乗輿独礼の出願要請をしたと

<sup>63</sup> 『三峯神社史料集1』。

<sup>64</sup> 横山晴夫（1979）『本山派修験三峯山の興隆』。

<sup>65</sup> 「花山院家猶子成之記」(『三峯神社史料集2』) なおこの儀式でかかった費用は七兩二分二朱錢六百三十五文であった。

<sup>66</sup> 「日雅大僧都轉任乃記」「春入峯權官江戸届」(『三峯神社史料集2』) で判明しているのみでも、献上物に金三十兩、御礼費用金十六兩二朱、お礼物金十三兩三歩二朱がかかっている。

<sup>67</sup> 触頭とは、各宗派に置かれた本山とその他寺院を結ぶ連絡係であり地域寺院の統率の役割をもつ特定寺院を指す。

いう背景があった。その後、大乘院の積極的な支援により出願成就となったが、成就した場合には大乘院へ金百両進上の内約があった。この件により、三峯は多額の費用がかかったものの、武家ではなく寺社が乗輿独礼という華々しい行列を披露することになり、秩父界限、沿道の百姓、江戸の庶民に至るまで、三峯の権威を見せつけるよい宣伝の機会となった<sup>68</sup>。「権僧正日俊御年礼日記」<sup>69</sup>には、11月12日の出願から、御年礼の許可、当日の様子、1月23日の帰山までの詳細が書かれている。帰山の際の途中の宿泊所では野上村・金崎村・皆野村・黒谷村・大野原村・贅川村などの周辺の村から役人たちに出迎えられ、いよいよ帰山した23日には、三峯山門前にまで人々が多く駆け付けていたことが記されている。

このように三峯山は、〈御眷属拝借システム〉により信仰を集め、講の広がりや名所化・観光地化によって資金力を持つようになり、その莫大な資金力を使って権力と結びつくことでさらに寺格の上昇に励み、一地方寺院とは思えないほどの権力を持つ有力寺院になっていった。

そしてこのような三峯山の成功は、関東周辺、特に武蔵野地域の他の寺社にも大きな影響を与え、武州御嶽山<sup>70</sup>や秩父武甲山など複数の山が、狼信仰を導入していったと考えられる。狼信仰というオオカミをシンボル化した〈御眷属拝借システム〉は、ある種完成されており、あたかもフランチャイズのように他山でも導入が容易く、各山々の由来や既存の信仰対象とうまく融合していた<sup>71</sup>。そのため、狼信仰が関東地方に多いというイメージ形成にもつながっていくほどの広がりを見せた<sup>72</sup>。

#### 4.3 明治維新後の三峯神社

明治維新後、日本は仏教ではなく神道を中心とする国家神道政策が推し進められていった。三峯山も同様に仏教から神道へと形を変えていく必要があった。朝日（1999）によれば、1869（明治2）に三峯大権現を三峯明神と改称し、それまで天台・真言・本山派修験の三宗兼帯だったものを、修験道と神道の二宗に分けた。これには明治政府自体が、修験道を一宗教とみるのか、神道・仏教のいずれかとするかの位置づけがまだはっきりしていなかったという背景もあった。しかし、結局修験道は宗派としては認められず、仏教に属するものとされたため、1871（明治4）には神道一途となった。この際に、三峯山は元来「神犬」を「御眷属」と呼んでいたが今まで通りの名称で神札として配札してよいか尋ねている。以下は岩鼻県の役人に提出した願書の一部である<sup>73</sup>。

「武蔵国三峰山観音院復飾并守札授与ヲ請フ」

復飾廃寺等ノ儀、并旧来三峯大明神ヨリ御眷属守ト唱へ差出候儀、以来神犬守ト唱へ、

これに対しての返答は以下の通りである。

差出来候眷属守取扱等ノ儀ニ付云々、伺出候趣、取調候処、三峯神社へ神犬附属ノ考證等、於当省難相分候間、一応神祇官へ指合候処、一社ノ縁起ハ不在候得共、古籍ニモ微證不相見、乍併近世守

<sup>68</sup> 横山晴夫（1999）「三峯信仰の展開」。

<sup>69</sup> 『三峯神社史料集 2』。

<sup>70</sup> 武州御嶽山では、権力争いから御師たちによる世尊寺の廃寺もあり、脱仏教からの国学の流れを受けた神道化の傾向があるため、オオカミは日本書紀における日本武尊の伝説と結びつけられた（斎藤, 1993）。

<sup>71</sup> 三峯山では山の神の眷属としてオオカミは位置づけられたが、静岡県山住神社周辺地域では天狗の眷属とされている。

<sup>72</sup> 西村敏也氏による狼信仰を持つ神社の由来についての一連の研究に詳しい。現在でも狼信仰を続けている神社もあれば、一時的な集客として狼の護符を作成していた神社もあった。

<sup>73</sup> 『新編明治維新神仏分離史料 第三巻』。

等差出候ハ、各社一般恒習ノ様ニ相成候間、当分其儘ニ捨置候（中略）眷属守之儀、神犬ノ唱ハ不相成候条、従前ノ儘可差置事

このように民部省は、従来通りの「御眷属」でよいという回答だった。それ以後、三峯山は日本武尊が開山した三峯神社として運営されていく。この間、世間の廃仏毀釈の波にのまれて破壊行為をするようなこともなく、建築物は保存し、図像器具は宝蔵へ収蔵するなど非常に冷静な判断をしていた<sup>74</sup>。明治維新後も、三峯山の信仰は疫病除け祈願をはじめとして、三峯講の盛りあがりは依然として衰えず、戦時中には武運を祈願し、現代になってからも、関東随一のパワースポットと呼ばれるに至っている。お守りの一部は入手困難で付近が渋滞となるほどの人気であり、混乱を避けるため2018年（平成30）より頒布が休止となっている。2020年以降のコロナ禍では、コロナ除けを期待されており、一般の人々によって、三峯神社の映像や写真がSNSに上げられているのは、やはり時代に適応していく三峯山たる所以なのかもしれない。

## おわりに

近世は貨幣経済が庶民に至るまでじっくり深く浸透した時代であり、それは社会システム、文化や宗教、流行や思想などさまざまなものを変化させてきた。あらゆるものに交換可能な貨幣は、信仰も現世利益という即時的に交換可能なものになった。出版文化の発達によって情報もお金で交換できるものとなり、『江戸神仏願懸重宝記』や『寺社仏閣願懸重宝記 初篇』のようなガイドブックが出版され、庶民は自分の願いに合わせて、まるでコンビニで商品を選ぶかのように寺社を選んで所望の護符を購入した。寺社側は人々の関心を得るために宣伝用の旅行記を出版し、開帳や富籤などのイベントを企画していく。そして信仰と交換された貨幣によって富を築いた寺院は、その貨幣を寺格上昇へ交換させていった。

これは仏教や修験道が<墮落<sup>75</sup>>したのではなく、人々が信仰心を失ったのではなく、貨幣経済が庶民層まで浸透した時代に合わせた<適応>だったと評価すべきであろう。

三峯山は狼信仰を、自山の再興から寺格上昇のための貨幣獲得手段<sup>76</sup>として導入した。周辺住民にとって、自分たちのアイデンティティでもある三峯山の名前が全国に広まるのが誉だったのは、乗輿独礼の際の歓待からも伺える。だからこそ、三峯山は周辺住民に対して福祉を施し、街道整備や橋掛けも行った。またアイデンティティには、金銭的な結びつきも含まれていた<sup>77</sup>。

三峯山の狼信仰を商業的な宗教と端的に判断するのではなく、貨幣は価値概念を数値化できるものだからこそ、三峯山の信仰の強さもまた貨幣を通すことで数値化されていたと考えることもできる。だからこそ幕末の神仏分離の動乱の中でも自山維持を見据えて、狼信仰を残すことを第一優先に、合理的で冷静な

<sup>74</sup> 鷲尾順敬（1926）「武蔵三峯山社神仏分離の始末」22頁。

<sup>75</sup> 辻善之助による「近世仏教墮落論」は、近世において仏教は幕府体制と密接になることで自由を失い、僧は戒律を守らず墮落し、民衆の心は仏教から離反したという主張である。この辻説が、近世仏教研究において、いかに継承され乗り越えられてきたかについてはオリオン・クラウタウ（2008）に詳しい。

<sup>76</sup> なお、四つ足除けでも有名な眷属礼だが、三峯山神領では1781（安永10）より猪鹿除けのために四季打ち鉄砲の拝借を願っている。その翌年の打留覚書には鹿四足猪四足の記載がある。神領内での狩猟が認められていることは興味深い「神領鉄砲拝借関係文書」（『三峯神社史料集5』）。

<sup>77</sup> 「三峯山道中記」製作の際に、岩鼻・強石が記載されなかったことを強石名主滝治が怒り、自害を叫びながら三峯山に掛け合った事件がある。その後、道中記に載せることで決着した。しかしこの滝治は乗輿独礼の歓待には多忙を理由に欠席する通達をしている「強石村滝治道中記」（『三峯神社史料集5』）。



行動ができたといえよう。

このように、近世は庶民生活の変化から、信仰は商業的で娯楽的なものになっていった。日本における宗教の世俗化を、近世における庶民経済の発達という軸で考える際に、三峯山による狼信仰の導入は、大きく注目できる事例である。

最後に、三峯神社護符の写真を快く提供していただいた國学院大學川田大晶氏に感謝いたします。

## 参考文献

### 一次文献（資史料）

『日本書紀』（小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『新編日本古典文学全集 3』小学館、1996年）

『新編武蔵風土記稿』（蘆田伊人編『大日本地誌体系 第35巻』雄山閣、1929年、国立デジタルコレクションより参照）  
竹村嘉兵衛・前川六左衛門『絹布重宝記』（『通俗経済文庫巻2』日本経済叢書刊行会、1916年、国立デジタルコレクションより参照）

津田大浄『十方庵遊歴雑記』（『江戸叢書12巻 巻ノ参』江戸叢書刊行会編、1917、国立デジタルコレクションより参照）

羽田野敬雄『萬歳書留控』（羽田野敬雄研究会編『幕末三河国神主記録（清文堂史料叢書）』清文堂出版、1994年）

伴信友「しるしの杉追加」（『嚶々筆話 二編』（関根正直・和田英松・田辺勝哉監修『日本隨筆大成 第一期9』吉川弘文館、1975年）

人見必大『本朝食鑑』（島田雄飛積注『本朝食鑑5』、平凡社、1981年）

根岸鎮衛『耳囊 巻之三』（長谷川強校注『耳袋 上』、岩波書店、1991年）

横山晴夫編『三峯神社史料集』全7巻、続群書類従完成会、1984-1998年

### 二次文献（研究書、研究論文）

朝日則安「武州三峯神社の神仏分離」（『山岳修験』24、16-80、1999年）

植月学「甲州周辺における狼信仰一笛吹市御坂町に伝わるニホンオオカミ頭骨をめぐる一」（『山梨県立博物館研究紀要』2、11-26、2008年）

上野益三「驚家口とニホンオオカミ」（『甲南女子大学研究紀要』5、89-108、1969年）

遠藤公男『ニホンオオカミの最後』山と溪谷社、2018年

大石慎三郎『江戸時代』中公新書、1977年

オリオン・クラウタウ「戦後日本における近世仏教墮落論の批判と継承」（『年報 日本思想史』7、30-43、2008年）

香川雅信『江戸の妖怪革命』角川ソフィア文庫、2005年

柄沢照覚「神拝祭式 加持祈祷神伝」1916年（志村有弘編（『庶民宗教民俗学叢書2』勉誠出版、1998年）

亀山明子・仲村昇・宇野裕之・梶光一・村上隆広「オオカミ(Canis lupus)の保護管理及び再導入事例について」（『知床博物館研究報告』26、37-46、2005年）

川田大晶「近世における三峯山参詣の実態と特質一代参講一山組織に注目して」（『儀礼文化』7、121-137、2020年）

佐々木高明『山の神と日本人』洋泉社、2006年

鈴木棠三『日本俗信辞典』角川書店、1982年（『日本俗信辞典 動物編』株式会社KADOKAWA、2020年）

斎藤典夫『増補 武州御嶽山史の研究』文研出版、1993年

高橋敏「幕末民衆の恐怖と妄想一駿河国大宮町のコレラ騒動」（『国立歴史民俗博物館研究報告』108、149-164、2003年）

- 千葉徳爾『オオカミはなぜ消えたか』新人物往来社, 1995年
- 辻善之助「神仏分離概略」1924年(『新編明治維新神仏分離史料集第一巻』名著出版, 33-112, 1983年)
- 中村禎里『狐の日本史 古代・中世びとの祈りと呪術』戎光祥出版, 2017年
- 中村禎里『狐付きと狐落とし』戎光祥出版, 2020年
- 夏目善吉「山の犬の話」『設楽 13』設楽民俗研究会, 1935年(『設楽』愛知県郷土資料刊行会, 404-407, 1974年)
- 西村敏也『武州三峯山の歴史民俗学的研究』岩谷書院, 2009年
- 菱川晶子『狼の民俗学 増補版』東京大学出版会, 2018年
- 平岩米吉『狼 その生態と歴史 新装版』築地書館, 1992年
- 平島裕正『ものと人間の文化史 7 塩』法政大学出版局, 1973年
- 平野哲也「秩父絹の生産と流通に関する一考察」(『歴史地理学調査報告』7, 107-137, 1993年)
- ブレット・L・ウォーカー著、浜健二訳『絶滅した日本のオオカミ その歴史と生態学』北海道出版会, 2009年
- 三木一彦「秩父地域における三峰信仰の展開-木材生産との関連を中心に」(『地理学評論』69A-12, 321-941, 1996年)
- 三木一彦『三峰信仰の展開と地域的基盤』古今書院, 2010年
- 宮家準『修験道-その伝播と定着』法蔵館, 2012年
- 宮家準『修験道小辞典』法蔵館, 2015年
- 宮田登「江戸町人の信仰」(西山松之助編『江戸町人の研究 第2巻』吉川弘文館, 227-271, 1973年)
- 宮田登『山と里の信仰史』吉川弘文館, 1993年
- 宮本袈裟雄『庶民信仰と現世利益』東京堂出版, 2003年
- 源宣之「狂犬病: その歴史と現状ならびに防疫対策」(『動物臨床医学』16(2), 27-33, 2007年)
- 武藤鐵城「狼犬の話」『月間 旅と伝説 07号』東京三元社, 15-24, 1936年(『<完全復刻>旅と伝説 第十八巻』岩崎美術社, 1978年)
- 湯浅隆「江戸の開帳における十八世紀後期の変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』33, 171-191, 1991年
- 横山晴夫「本山派修験三峯山の興隆」(『國學院雑誌』80(11), 284-296, 1979年)
- 横山晴夫「三峯信仰とその展開」(五来重編『山岳宗教研究叢書 14 修験道の美術・芸能・文学 I』名著出版, 380-403, 1980年)
- 横山晴夫「三峯信仰の展開」(『山岳修験』24, 1-22, 1999年)
- 吉野裕子『吉野裕子全集 4』人文書院, 2007年
- 鷲尾順敬「武州三峯山社神仏分離の始末」1926年(『新編明治維新神仏分離史料 第三巻』名著出版, 3-22, 1983年)